

## メトロポリタン美術館蔵「伊勢物語図屏風」が見せる伊勢物語の世界

安達敬子（京都府立大学）、亀井若菜（滋賀県立大学）

メトロポリタン美術館蔵「伊勢物語図屏風」は、伊勢物語から12段17場面を選んで描かれた小型の六曲一双、紙本着色の屏風である。各場面は四季の順に配され、その図柄の多くはチェスター・ビーティー本系の図様と類似している。画面上には各場面で詠まれた和歌の文字も書かれている。制作年代や制作の事情は不明であるが、伊藤敏子著『伊勢物語絵』（角川書店、一九八四年）において17世紀のものとして初めて紹介された。その後詳細な研究論文は出されていない。

本屏風は伊勢物語を描く屏風として、他の作品にはない特色を有している。描かれた17場面のうち12場面に女性が登場しており、残りの5場面中4場面にも女性を想うが故の行動をする男性が描かれているのである。その12場面について様々な注釈書を繙いたところ、鎌倉時代の『冷泉家流伊勢物語抄』や、その流れを引く室町中・後期の『伊勢物語奥秘書』『伊勢物語懐中抄』『伊勢物語陽成院伝』といった古注の系統の注釈書において、二条后と有常娘にじょうきさき たもつねむすめに比定される女性が登場する段ばかりであることが判明した。言うまでもないが、伊勢物語本文には登場人物の名は、多くの場合記されていない。また、ある段と別の段との時間的な前後関係も記されていない。そのような伊勢物語の特定の段を、一連の人物の物語として読もうとしたのは後世の人々であり、各注釈書にはそれぞれの解釈が示されている。

本屏風はこれら古注の系統の人物比定に基づけば、二条后に5場面、有常娘に7場面を費やしており、それらを右から左へと順に配することで、この屏風ならではの伊勢物語世界を見せるものとなっている。右隻では、業平の二条后への恋情と、有常娘との出会い、左隻では、二条后の業平への嫉妬と執着、そして有常娘の誠実な愛情による業平との愛の復活が表現されている。つまり本屏風では、業平の二条后との禁断の恋の始まりと終わり、有常娘との関係の始まりと復活が、左右隻をまたいで表されているのである。

このように二条后と有常娘を描く背景には、中世から近世における二人の人物像についての理解があったと考えられる。清和天皇の女御となる二条后は、伊勢物語における業平の恋愛の相手として最重要であるものの、「密通した後」として女訓書や古作の謡曲「雲林院」では批判的に取り上げられている。一方有常娘については、世阿弥の謡曲「井筒」以降、「待つ女」「貞女」のイメージが定着し、近世に入ると御伽草子や女訓書などで貞女の典型、婦徳の鑑として顕彰される。本屏風ではこうした理解を背景に、二条后と有常娘が上述したように描かれたのだと考えられる。

しかし、それにとどまらず、本屏風の各場面を見ると、定型化した伊勢物語絵の表現を見直し、その場面における人物の微妙な心の動きまでも見せるような表現がなされている。本屏風は女性への婦徳を示しつつ、独自の伊勢物語世界を見せるものであると言えるだろう。